

旧大乘院庭園の調査（平城第 365 次）

興福寺の南方、現在奈良ホテルが建つ朝香山の南麓に、旧大乘院庭園があります。大乘院は興福寺の門跡寺院で、その庭園は室町時代の尋尊大僧正による修築後、改修を経ながら江戸時代末に至るまで南都随一の名園として栄えました。今回の調査は、庭園の中心に位置する東大池の西北隅と西南隅を対象に、10月から開始し、現在も継続中です。

このうち西南隅の調査区からは意外なものが出土しています。近代土管の初出とされる陶管で、大乘院の池水を外へくばる暗渠に用いられていました。この陶管は、明治5年（1872年）、愛知県常滑の製陶業者・鯉江方寿が、お雇い外国人・R.H.プラントンの依頼により、横浜居留地の下水道用につくったものです。しかし納入後、規格外とされて全数不合格となり、地元の資材商に払い下げられてしまいました。東京の新橋停車場跡地からはこの陶管がまとまって出土しており、近隣の土木工事にすぐに流用された様子がうかがえます。一方、鯉江方寿は陶管の改良にとりかかり、翌年には新型の陶管を開発、これが全国へ普及する近代土管の原形となりました。

このように、この陶管は近代土管の試作品ともいえるもので、その使用は、本格的な近代土管が普及する以前の明治5年から数年の間と推察できます。この陶管がどのような経緯で大乘院に持ち込まれたのかはわかりませんが、明治時代末期に国有鉄道法により、偶然にも大乘院が新橋停車場の所有者であった鉄道院（現在のJR）の所有となることと、不思議な縁を感じずにはられません。

調査は12月末まで継続する予定です。調査終了後には、あらためて調査の全容を報告したいと思います。（平城宮跡発掘調査部 金井 健）



横浜居留地下水道用の陶管を用いた暗渠（西南から）